

高大連携による歴史授業の研究

寺前 駿（和歌山県立和歌山北高等学校教諭）

三品 英憲（和歌山大学教育学部教授）

I 研究の目的

本共同研究事業の活動は、高等学校の世界史の授業において、大学の知見を取り入れ、史資料を用いた授業づくりを中心に、高等学校における世界史教育の諸課題を初歩的に研究することを目的としている。

来年度より実施される新学習指導要領において、高等学校における歴史教育は大きな転換点を迎える。それは、「歴史総合」を必修とし、「日本史探究」「世界史探究」を選択制とすることである。戦後の歴史教育では一貫して「日本史」と「世界史」とに分割されてきたが、今回の改定によって、「歴史総合」として統合された内容を学習したのちに「日本史探究」「世界史探究」を選択して学習することになる。この転換は、今後の高等学校での歴史教育においては、知識を得ることだけではなく自ら思考し判断し表現できる力を身につけることがより一層重要になることを意味している。そのためこの研究では、思考力・判断力・表現力の育成のための授業づくりの一環として史資料を積極的に活用する授業を模索することに重点を置いた。（文責：寺前）

II 研究の経過

昨年度（2020年度）は、寺前が和歌山北高校の第2学年の「世界史B」の授業を行い、三品がそれを参観し、その後協議をするという形で実施した。今年度（2021年度）も、三品が寺前の和歌山北高校の第2学年の「世界史B」の授業を参観し、その後協議するという形で実施した。

また、今年度は授業づくりだけではなく、定期考査において思考力を問う問題を導入すべく大学側の知見を取り入れて考査内容を検討し、その協議を踏まえて作成された考査を高等学校において実施した。このように今年度の研究活動は、授業の準備、実施、振り返り、考査の作成、実施といった世界史教育の一連の流れ全体に幅を広げた。

その一方で、新型コロナウイルスの感染拡大と緊急事態宣言の発令により、当初の計画からの修正が生じた。1学期には、高校への外部関係者の授業参観の制限があり、また、2学期のはじめには高校の休校措置、オンライン授業の実施があったため、三品が寺前の授業を参観し協議するという形での共同研究は、2学期の中頃まで実施することができなかった。ただ、授業の参観が実施できない期間も、寺前が準備した授業案を三品に送ったうえで、三品研究室への訪問やメール会議などによって改善点について協議した。

以下は、今年度実施した研究打ち合わせと授業参観、協議会の記録である。研究授業は和歌山北高校2年D組の「世界史B」において実施した。打ち合わせは、いずれも寺前と三品の二人で和歌山大学の三品研究室にて行った。

2021年7月27日（水）13:30～ 研究打ち合わせ

9月14日（火）～9月24日（金） メール会議にて授業内容に関する質疑応答

10月14日（木）13:30～ 研究打ち合わせ

10月26日（火）14:25～15:15 研究授業「中華帝国の形成①」

15:15～ 協議会

12月2日(木) 13:30～ 研究打ち合わせ

以上のように、打ち合わせを3回、授業内容に関するメール会議を1回、研究授業を1回、協議会を1回実施した。(文責：寺前)

Ⅲ 成果と課題

①高校側から見た成果と課題

今回の共同研究における成果は、授業内容に関する質疑応答や研究打ち合わせ等を通じて、世界史に対する専門的な知識を学び、それを授業において活かすことができたことである。今年度の研究授業「中華帝国の形成①」では、中国の秦の政策の特徴を教科書や史料から読み取る活動を行った。使用した史料は『史記』始皇帝本紀の郡県制・度量衡・文字の統一に関する文書である(歴史学研究会編『世界史史料3 東アジア・内陸アジア・東南アジア I 10世紀まで』、岩波書店、2009年、所収のものを使用した)。

今回の研究授業において重視した点は、春秋戦国時代から秦による統一までの間で、何が継続し、何が変化したのかという問題である。そのため、10月26日の研究授業において秦の政策について取り扱うための準備として、その前時の授業では、秦の政策の特徴を意識して春秋戦国時代の特徴を理解させることに重点をおいた。その意識しておくべき点とは、封建制度の変化、春秋戦国時代の各国における貨幣経済の発展、そして諸子百家の隆盛である。春秋戦国時代には鉄製農具と牛耕が普及し、農業生産力が向上し、それにともない小農民の自立が進み、氏族集団の解体がおきた。周代の封建制度は、氏族集団を基盤として成り立っており、これが解体されるということは、封建制度が変化し戦国時代の各国が中央集権的な体制に変化することを意味する。この点は、秦の郡県制などをはじめとする中央集権的政策と類似する。また戦国時代の各国は富国強兵政策をとっており、農業の振興や武器などの軍需物資の獲得をめざした。これにより貨幣経済が浸透し、各国で特有の青銅貨幣が生産された。秦の時代には、半両銭による貨幣の統一がなされたが、これは春秋戦国時代と秦の時代の政策の違いと捉えるより、春秋戦国時代に各国で行われていた政策を秦が中国全土に拡大したと捉えるほうが良いと考える。そして、氏族集団の解体や貨幣経済の発展によって人の移動が活発になり、能力のある人々が自身の思想を各国の有力者に売り込むことがさかんに行われ、これが諸子百家の隆盛に繋がった。秦は、法家を採用したが、これもまた有力者が国を富ませるために思想家を採用した春秋戦国時代の特徴と繋がる。

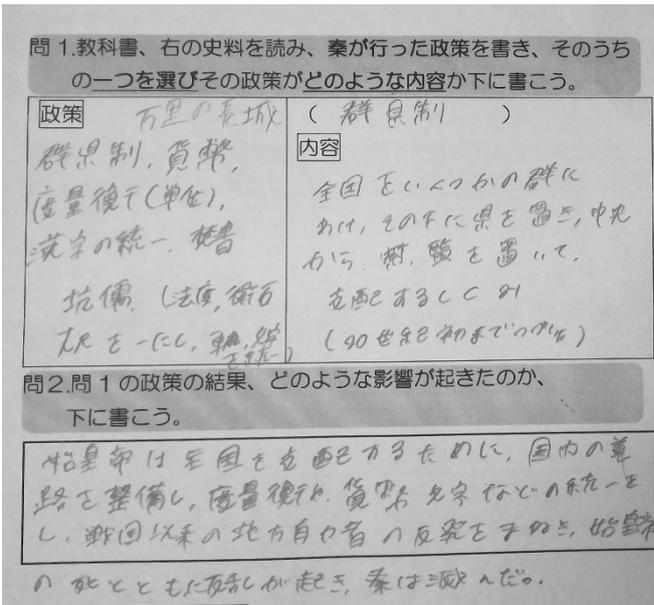
以上のような歴史認識の形成については、研究打ち合わせやメール会議等を通じて三品からの助言を受けた。また、研究授業「中華帝国の形成①」の前に二学期中間考査があり、この作問を寺前が担当したため、春秋戦国時代の重要な点について以下のような論述を求める問題を作成した。

- ①周代の封建制度とはどのような制度か、「封土」の語句を用いて簡潔に記しなさい。
- ②儒家の思想の内容について具体的に記しなさい。
- ③春秋戦国時代の社会がそれまでの周代とどのように変化したか、「氏族」「青銅貨幣」の語句を用いて記しなさい。

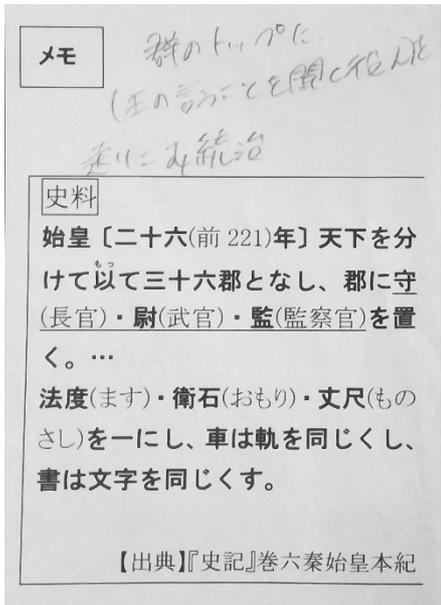
これらの作問にあたっては三品からの助言を受け、用いる語句などの修正などを行った。これらの出題に対し生徒の解答は、無解答や教科書の用語を組み合わせた解答が目立った。特に、③の「氏族の解体」というポイントを理解していない生徒が多くあり、授業における理解度の定着の向上を図る方法を模索する必要があると感じた。この点は来年度以降の課題としたい。一方で、封建制度から転換し小家族経営になったという点をしっかり理解している生徒もあり、生徒ひとりひとりに合わせた指導を行うことも大切であるとわかった。

その後、実施した研究授業では、秦の政策の春秋戦国時代との違いを意識するため、導入の時間におい

て春秋戦国時代の特徴を丁寧に確認する時間をとった。その後、本題である秦の政策について、教科書や史料から読み取る際には、秦の政策を書き出したあと、その政策によってどのような影響が起きたのかについて考えるように指導した。政策については教科書から書き出すことの出来る生徒が多くいたが、その後の政策の影響については筆が止まる生徒が多く存在した。そのため個別に言葉かけを行い、解答を引き出すように指導した。一方で、自分の考えで書く生徒も存在した。例えば、【写真 1】にあるように、「始皇帝は全国を支配するために、国内の道路を整備し、度量衡や貨幣文字などの統一をし、戦国以来の地方有力者の反発をまねき、始皇帝の死とともに反乱が起き、秦は滅んだ。」と解答した生徒がいた。また、【写真 2】のメモのところには「群〔郡〕のトップに（王の言うことを聞く役人）を送り込む統治」と書かれている。ここからは、秦の政策は中央集権的である点に特徴があり、それにより反発が生まれたと考えることが出来た生徒もいたことがわかる。



【写真 1】生徒がワークシートに書き込んだ内容



【写真 2】生徒のメモ

今後の課題は、来年度より実施される「歴史総合」「世界史探究」において、史資料を用いた授業実践を行うことである。その際、生徒にとって必要な歴史的思考力とは何かを具体的に考え、そしてその歴史的思考力を培うためにはどのような実践が適切であるかを考えていきたい。(文責：寺前)

②大学側から見た成果と課題

寺前教諭との共同研究は 2 年目である。今年度も、新型コロナウイルス感染拡大という困難な状況にありながらも本研究の実施を承諾し、貴重な機会を与えて下さった和歌山北高等学校、とりわけ雑賀敏浩校長に厚く御礼を申し上げたい。

昨年度の成果報告書には、この共同研究における私の役割が、「授業での史資料の扱い方」から「各授業回の目標に適切な史資料の選定」へ、そして「単元目標の捉え方」へと、より深いレベルに移行していったと書いた。今年度の共同研究はこの到達点を踏まえて企画することになったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響が見通せない中で、授業参観の回数を十分確保することが困難であることは容易に予想できたため、数少ない授業参観（研究授業）の機会を最大限有効に使うということを念頭に計画した。そして実際、授業参観は 10 月 26 日の一回しか実施できなかった。

この 10 月 26 日の研究授業に向けては、9 月の時点で寺前教諭から当該授業では春秋戦国時代から秦

帝国への展開を取り上げること、そこでは『史記』を史料として提示する予定であることなどが示され、この史料の解釈などをめぐる疑問について私との間でメールを使った質疑応答が行われた。その過程で改めて寺前教諭から、「戦国時代における鉄製農具と牛耕の普及が、なぜ氏族社会の解体につながるのか。また、そうした歴史過程と後の時代に顕著となる豪族の出現とはどういう関係にあるのか」、「諸子百家が唱えた思想は、『理想の社会を目指したもの』と捉えるべきか否か」といった問いが出された。私はこれらの問いに対し、主として中国史研究会の1980年代～90年代の研究成果を踏まえて回答した。これは上述した授業のかかわり方而言えば、「単元目標の捉え方」のレベルで春秋戦国時代から秦帝国の成立までの時代の社会と政治体制の変化の大まかな流れを解説したということになるだろう。この点では、昨年度の到達点を改めて確認できたといえる。

しかし、本稿冒頭で述べたように本研究の最終的な研究目標が「探求」への対応であることを考えれば、授業者が単元として取り上げる時代の歴史的な流れを理解して授業に生かすだけでは不十分であろう。「探求」科目の授業で生徒に身につけさせたい「思考力」とは、史料をその時代の一側面を説明するものとして解釈し位置づける力ではなく、ある地域のある時代の歴史に関して自分で「問い」を立て、その「問い」に対する答えを構成するものとして、史料に書かれた情報を（史料批判を行ないつつ）取捨選択する力だと考えるからである。ここで必要になるのは「問いを立てる力」であろう。

このように考えれば、今回の共同研究の中で寺前教諭が私に問うた「問い」の重要性が改めて浮かび上がる。寺前教諭が提起した「問い」は、当該時期の中国社会の変化を根底から理解するうえで出発点となる「問い」であった。まさに「探求」の出発点となる「問い」であったと言えよう。もちろん、これらの「問い」は、寺前教諭が春秋戦国時代から秦帝国の統一に至る歴史過程について深く理解していたことを前提として初めて提起することができたものである。その意味で、高校生に同じレベルの「問い」を立てることを求めることはできない。しかし、少なくとも授業者の側が「問い」を立てることができなければ、そして、その「問い」に答えを出すべく史料を探し、探し出した史料に書かれた情報を自分で吟味することができなければ、高校生に「問い」を立てさせて歴史を探究させる授業を構成することはできないだろう。このことを認識できたことが今年度の共同研究の成果であった。

来年度もこの共同研究を継続することができるならば、そこでは、ある地域・ある時代の歴史においていかに「問い」を立てるかということが課題となるだろう。大学側としては、授業者が歴史において「問い」を立てることに対し、専門的な知見を踏まえてどれだけサポートできるかということが問われている。「探求」科目の授業が始まるにあたり、「問い」を意識した授業づくりを教育現場との共同で研究していきたいと考えている。

(文責：三品)